（様式４）　　令和7年度　研究報告書

派遣者番号	Ｒ７Ｋ１８	氏　名	曽根原　加果
研究主題 ー副主題ー	クラウド上に共有された振り返りにおける児童の目的意識と記述内容の変化の傾向		
派遣先大学	東京学芸大学　教職大学院	指導担当者	堀田　龍也
所属	板橋区立上板橋第四小学校	所属長	山藤　知子

キーワード：振り返り　振り返り記述　クラウド活用　コメント機能　目的意識

要旨：　クラウド上に共有された振り返りにおける児童の目的意識と振り返り記述の変化の傾向を整理した。目的意識の調査はオンラインを用いて，単元前・単元中・単元後の３回実施した。調査期間中に全10時間の授業を行い，毎回15分程度の振り返りの時間を設けた。振り返りを記述するシートはクラウド上で共有し，児童同士が参照，コメントできる環境を設定した。質問調査の結果を基に目的意識の変化を整理し，その違いが振り返りの記述にどのように表れているかを分析した。その結果，単元前に【目的意識の欠如】に該当した児童は，単元後には【学習改善・成長への志向】や【学びの現状把握】へと移行する傾向が見られた。振り返り記述の分析からは，単元後にかけて記述の具体性が高まる傾向が確認され，特に，感情を含めて学びの状況を捉える記述が見られる場合には，目標設定や学び方への言及が具体的に記述される傾向が見られた。

クラウド上に共有された振り返りにおける児童の目的意識と記述内容の変化の傾向

曽根原 加果

１．はじめに

学習の過程を振り返り，思考や行動を調整する力として「学びの主体的な調整」が位置付けられており（中央教育審議会 2025），振り返りの重要性が指摘されている。一方で，振り返りが形式的な活動に陥っている現状から，児童にとっての振り返りの意味や価値を押さえる必要性が述べられている（小林・梶浦 2025）。

川島（2021）は，児童の振り返りの目的意識の実態を調査し，振り返りの有用性を認識している児童が多いことを示している。しかし，授業実践を通して児童の目的意識の変容や，その変容が振り返り記述にどのように表れるのかについては検討されていない。

そこで本研究では，クラウド上に共有された振り返りにおいて，児童の目的意識と記述内容の変化の傾向を整理することを目的とする。本研究の知見は，教師が児童の目的意識を把握し，振り返りの指導や目標設定の支援を行う際の参考となると考えられる。

２．研究の方法

2025 年 10 月上旬から 11 月下旬にかけて，都内公立小学校第６学年の児童 26 名を対象に振り返りに対する質問調査および授業における振り返り記述を収集した。

振り返りに対する目的意識の変化を把握するため，オンラインアンケートを用いて，単元前・単元中・単元後の３回の質問調査を実施した（**表１**）。

授業実践は外国語科の２単元（全 10 時間）において行い（**表１**），毎回の授業で振り返りを実施した。振り返りを記述するシートは，表計算ソフトを用いて作成した。クラウド上で他者の振り返りを参照することによる学びの自覚化（稲木ほか 2023）や，学習者同士がコメントを送り合うことによる内省やメタ認知の喚起（村田 2004）を踏まえ，クラウド上で共有し，記述

表１　授業の概要及び意識調査の時期

単元	時	学習内容
Check Your Steps1		（単元前）振り返りの目的意識の調査
	1	単元目標「自分のことを伝えるために，日常生活や最近の出来事について内容を整理し，考えや気持ちなどを発表することができる。」を知り，各自のゴールを設定する 言語活動を通して，教科書の言語表現を習得する。
	2	日常生活や最近の出来事について，内容を整理し伝え合う。
		振り返りに関する話し合い（15 分程度）
		（単元中）振り返りの目的意識の調査
Unit5 Where is it from?	1 2	単元目標「自分たちと世界とのつながりを知るために，自分のお気に入りのものの生産国について，聞き取ったり紹介したりすることができる。」を知り，各自のゴールを設定する。
	3 4	言語活動を通して，教科書の言語表現を習得する。
	5 6	身の回りのものの生産国について，表現を振り返ったり情報を整理したりして，発表の内容を考える。
	7 8	友達とお気に入りの身の回りのものの生産国などを発表する。
		（単元後）振り返りの目的意識の調査

を参照・コメントできるようにした。また，２つの単元の間に振り返りについて話し合う時間を設定した（川島 2021）。

分析対象は,データの欠損がない22名の目的意識の調査の回答および振り返り記述とした。まず，質問調査の回答を基に児童の目的意識の変化を整理し，その結果を踏まえて，目的意識の違いが振り返り記述の内容にどのように表れているかを検討した。

３．結果

振り返りに対する目的意識の調査結果を**表２**に示す。以降，分析により付した分類カテゴリは【　】で示す。

目的意識の記述を分析した結果，８つのカテゴリに分類された。いずれの調査時点においても，【学習改善・成長への志向】が最も多く見られた。また，【学びの現状把握】は単元前の調査では２名であったが，単元後の調査では６名に増加した。一方，【目的意識の欠如】は単元前には６名であったが，単元中には１名に減少し，単元後も同様の傾向が維持された。

単元前の振り返りでは，取組の紹介や形式的な目標設定にとどまる記述が多く，学習の現状把握や学び方への言及において，具体性を伴う記述は限定的であった。これに対し，単元後の振り返りでは，学習の現状把握や目標設定，学び方への言及において，具体性を伴う記述が見られるようになった。特に，【学習改善・成長への志向】を目的意識とする児童の記述では，感情を含んだ学習の現状把握や，改善の方向性を踏まえた具体的な目標設定が見られた。一方で，すべての記述が目的意識と対応しているわけではなかった。

表２　質問項目５の結果

分類カテゴリ	単元前	単元中	単元後
学習改善・成長への志向	7	12	9
学習内容の定着・内面化	5	3	2
学びの現状把握	2	3	6
他者との比較による自己理解	1	1	0
他者への共有・発信	0	1	1
目的意識の欠如	6	1	1
記述内容不明	1	1	0
その他	0	0	3
合計	22	22	22

※　n=22

４．考察

振り返りに対する目的意識は，単元の進行に伴って変化する様子が見られた。特に，単元前に【目的意識の欠如】に該当した児童の中にも，単元中以降には，振り返りを学習の改善や学びの現状把握と捉える回答が確認された。

また，振り返り記述を分析した結果，単元後にかけて記述の具体性が高まる傾向が確認された。特に，感情を含めた学びの状況を捉える記述が見られる場合には，それを踏まえた目標設定や学び方への言及が具体的に記述されている点が特徴的であった。こうした具体性を伴う記述の中には，クラウド上で他者の振り返り記述を参照したり，コメントを受け取ったりした記録が確認された。

以上のことから，振り返りについての話し合いや，クラウド上での共有やコメントを含む振り返りの実践の中で，児童の振り返りに対する目的意識は変化していたということが示唆された。さらに，児童の振り返り記述には，感情を含めた学びの状況把握を起点とした具体性を伴う表現が見られていたと捉えられる。

５．まとめ

本研究では，クラウド上に共有された振り返りにおいて，児童の振り返りに対する目的意識と振り返り記述の変化の傾向を整理することを目的とした。その結果，振り返りについて話し合う時間を設け，クラウド上で共有しコメントを送り合いながら振り返りを行う実践の中で，児童の振り返りに対する目的意識に変化が見られた。また，振り返り記述の分析からは，単元後にかけて記述の具体性が高まる傾向が確認され，特に，感情を含めて学びの状況を捉える記述が見られる場合には，目標設定や学び方への言及が具体的に記述されていた。これらの結果から，本研究で行った振り返りの実践において，児童の振り返りに対する目的意識と振り返り記述の表現の双方に変化が見られたことが示された。

参考文献

中央教育審議会（2025）教育課程企画特別部会論点整理. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/mext_00010.html（参照日 2026.01.30）

稲木健太郎，泰山裕，大久保紀一朗，三井一希，佐藤和紀，堀田龍也（2023）小学校第４学年児童による思考ツールの選択に関するメタ認知にクラウドで共有した他者の振り返りの参照が与える影響. 日本教育工学会論文誌，47（Suppl.）：105-108

川島隆（2021）子どもの側からとらえた授業の「振り返り」の意義と効果. 浜松学院大学短期大学部研究論集，19：31-37

小林和雄，梶浦真（2025）「振り返り」の基礎知識（第３版）. 教育報道出版社，pp11-13

村田晶子 （2004） 発表訓練における上級学習者の内省とピアフィードバックの分析--学習者同士のビデオ観察を通じて. 日本語教育学会学会誌委員会編，120：63-72